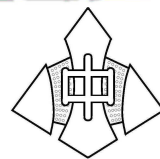


- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年9月10日(金)発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

手をたずさえて

震災体験からわかったこと 10年半経過した東日本大震災

東日本大震災から10年半が経過しました。あの時、郡山市のこんなにも近くにこんな学校がありました。昨年度も紹介しましたが、私がかつて勤務していた本宮第二中学校の話です。今回、当時のある生徒の作文を紹介します。これは、震災からちょうど1年経過した2012年3月11日に開催された『本宮市復興の集い』で発表されました。「復興メッセージ」として、参加した方々からたくさんの称賛をいただきました。

「えっ！ 何、地震？」

卒業式の余韻が残る2011年3月11日、金曜日、午後2時46分。僕たちは、今まで体験したことのない巨大地震に襲われました。マグニチュード9という観測史上世界4番目の規模の大地震でした。幸い僕の家はCDが少し落ちた程度で大丈夫でしたが、停電になってしまい、暗い夜を過ごすことになりました。暗い夜、灯りのない中、ラジオ、ローソク、懐中電灯、ランタン…、そんなものが頼りでした。僕は生まれはじめて感じる電気のない不便さ、そして情報のないさみしさ、考えもしなかった恐怖を味わいました。夜、親子4人で同じ部屋に布団を並べて寝ました。遠くから、「ゴォー」という地響きが聞こえてくると、その直後大きな揺れの余震が起きました。余震は何度も繰り返して起こり、その度とても大きな不安と恐怖を感じました。ふと、「学校のみんなは大丈夫なのか？学校には行けるのか？」と考えました。

次の日、両親と車で状況を確認しに学校まで向かいました。すると驚愕でした。僕たちの本宮二中の校舎や体育館が壊れていました。壁のあちこちには、大きなひび割れが縦、横、斜めに走り、校舎の下の地盤は沈んでいて、校舎は折れているように見えました。本当にすさまじい光景でした。僕は、「これじゃ、学校は無理か…」と思いました。目の前の信じられない光景に、とても悲しく淋しい気持ちになりました。そして、「明日からどうなるのだろう？校舎の中は大丈夫なのかな？」と動揺してしまいました。



僕たちはあの日以来、学校に入ることができずに、仲間とも会えない状況になってしまいました。学校からは、しばらく校舎に近づかないようにとの連絡があり、休校となりました。休みの間、友人や部活動のことが気になり、落ち着かない日々が続きました。

そして、追い打ちをかけるように原子力発電所の爆発事故が起きてしまいました。この原発の事故は、放射能により、僕たちから校舎だけでなく、校庭（グラウンド）も奪い去ってしまったのです。野球部に所属していた僕にとって本当につらい出来事となりました。

「外出はダメ、土は触ってはダメ、マスクをきなさい、カッパのようなもので大気から身を守りなさい。」テレビからは毎日のように、原発の情報が流されていました。放射能により、二重にも三重にも自由が奪われた気がして嫌になっていました。終業式もなく3月が過ぎ、不安な時が流れていきました。



4月になり学校生活が地区内の公民館で始められることを知り、素直に「よかった」と思いました。仮校舎でしたが、教育委員会や地域のみなさんや保護者の方々の協力で、新しい学校生活をスタートすることができました。体育館を仕切り、机・椅子を置いての勉強でした。

始まってみると、隣の教室の音が聞こえたり、ものすごい暑さになったり、実験や実習などがなかなかできなかったりで大変でした。体育館もないので、体育の授業は、時間をまとめてとり、バスで移動して別の公民館の体育館で実施したり、部活動も場所や活動時間が制限されたりして不便でした。

でも、僕たちは、“不便なことは不幸なことではないということ”を学びました。知恵を出し合い、協力することによって、ひとつずつ問題を克服していけるということも学びました。お互いを思いやり、助け合うことの大切さも学びました。同時に、今までの生活がどれだけ恵まれていて、幸せだったのかということも実感することができました。当たり前前の生活が当たり前でなくなった時の大変さをみんなが実感できたと思います。でも、そこから学ぶことは、僕たちにとってとても意味のある大きいものでした。

今は校庭に建てられたプレハブの仮設校舎で生活しています。二学期からは授業の中で実験や実習なども少しずつできるようになるなど、通常に近い学校生活を送ることができるようになりました。しかし、まだ体育館がないので、体育の授業や学校行事は、バスなどで移動し、他の施設を借りて実施しています。

この冬は気温が非常に低くなり、先日は仮設校舎の水道管が凍り、水が使えなくなるという事態が起きました。創意工夫と少しの我慢、業者の方々の方力でも乗り越えることができました。多分、これからも様々なアクシデントが起こると思います。でも、みんなで協力し合えば、今はどんな困難でも乗り越えられる気がします。一人一人の力は小さいかもしれないけれど、力を合わせれば大きな力になっていくということも、僕は震災を通して得ることができました。こんな経験を積み重ねた僕たちの本宮二中は、きっと助け合い・協力し合える「絆」の強い学校へと進化していくと思います。そして、震災体験から学んだことは、僕たちがこれから生きていく上で、きっとプラスになる日が来ると確信することができます。今回の震災では、“生きてくても、生きることでできなかった命”がたくさんあり、多くの犠牲がはらわれました。未だに多くの人々が厳しく苦しい状況の中で生きています。この震災の経験を風化させないことも僕たちの大きな役目であると強く思っています。そして、いつ起こるか分からない災害に対して、“備えること”もとても大切だと感じました。災害が発生した時にどのような行動をとるのか、具体的なイメージを持つこと、そして、訓練などに手を抜かず本気になって取り組むことです。



あの震災から今日で一年が過ぎ、僕たちの生活は少しずつ元に戻ろうとしています。道路の復旧や、家々の屋根の瓦の修復、そして、僕たちの本宮二中の校舎や体育館の建設準備などが整うなど、「復興」が形となってきています。とてもうれしいことです。そして、ここにたどり着くまでには、様々な人々から多くの支援や励ましをいただきました。僕たち本宮二中学生は、多くの人々によって「支えられている」「生かされている」ということを決して忘れてはいけません。そして、これらの人々への恩返しとは何なのかを考え、実行していきたいと思えます。(生徒作文)



今日(避難訓練の日)は「いのちを見つめる日」です!

今回は「まん延防止等重点措置」期間中の避難訓練ということで、ZOOMを利用しての防災講話に切りかえて実施しました。今、我々には、地震、火災、水害への備えなど、多岐にわたる危機管理が要求されています。まずは避難して命を守ること、その先避難所での生活や、停電が起こり、夜の寒さ、スマホが使えないで情報が入らない状況など、現在のコロナ渦では避難生活もより不便なものになることが予想されます。

私たちは災害をいつも他人事のように感じてしまいます。いざという時の準備、「心の準備」、「ものの準備」、家族との「連絡の準備」などを確認しておく必要があります。そして最後に、とても大切なことをひとつ確認しておきます。「避難訓練」を実施する日は「いのちを見つめる日」であるということです。

